

都道府県名

福井県

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	小浜市立小浜小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	1	2	2	2	13	22
児童数	46	44	55	36	47	47	5	280	

研究の概要

1. 研究主題

確かな学力を培う豊かな学びの創造
算数科を中心とした学びのシステムづくり

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

・全学年・算数

学校として、当該教科に関する研究実績があり、理解度、達成度、学習スピードなどにおいて差が出やすい教科であるため。また、すべての児童が基礎・基本や学び方を十分に付けられるよう全学年で実施した。

(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>テーマ 確かな学力を培う豊かな学びの創造</p> <p>研究の見通し（仮説） 学力を、揺るぎない基礎・基本、思考力・表現力・問題解決能力、学び続ける意欲、個性・能力の伸長と捉え、確かな学力を向上させていきたいと考えた。そのためには、TT指導、少人数指導、習熟度別指導など個に応じた指導を充実させていくこと、学ぶことの楽しさを体験し、学習意欲を高めるとともに、学びの質を高めていくことが必要であると考えた。 具体的には、授業で新しい単元に入る前に、基礎・基本の明確化を図り、単元目標の分析をし、指導計画を立てる。そして、単元に入る前に既習事項が定着しているか事前テストを実施し、基礎・基本の実態把握をする。定着していない児童については、単元前に事前指導を行う。授業では、TT指導、少人数指導、習熟度別指導を取り入れながら、個に応じたきめ細かな指導を実施する。そのためには、学習環境整備、教材や教具の開発が必要である。取り組みがどうであったかという評価も大切である。評価の観点や評価方法を工夫し、児童が学習目標に到達したか、教師の指導はどうであったかを客観的に振り返り、事後の指導に生かしていく。このような学習活動を積み重ねていく中で、児童が充実感を味わい、学ぶ楽しさやよさを実感してくれるのではないかと考えた。このことが、児童にとって、学びの大きな支えとなり、基礎・基本を習得し、学び方を身につけ、生きる力の育成を図っていけるのではないかと考えた。</p> <p>研究の内容・方法 基礎・基本の定着 ア 授業において基礎・基本の定着を図る TT指導、少人数指導、習熟度別指導など個に応じたきめ細かな指導を行い、基礎・基本の確実な定着を図っている。 イ 学校裁量の時間において基礎・基本の定着を図る 読書の日と基礎・基本の定着の日とに分けて、毎日、始業前の10分間を朝学習として取り組んでいる。また、月に一度、水曜日の第6校時を補充学習の時間として活用している。 ウ 繰り返し学習において基礎・基本の定着を図る</p>
--------	--

現在の学習や既習事項を繰り返し学習することで定着を図る。授業始めの5分間を100ます計算やエレベーター計算など学級独自の方法で取り組んでいる。また、家庭学習を大切に、家庭での学習習慣が身に付くよう指導している。

個に応じた指導（TT指導、少人数指導、習熟度別指導）

アねらい

一斉指導だけに頼るのではなく、一人一人の子供の個性、よさ、可能性の伸長に適切に対応し、基礎・基本を確実に身に付けさせていくという視点から、1学級または1学年を複数の教師で指導していくTT指導、少人数指導、習熟度別指導等の学習形態を取り入れることにした。どの学習形態にするかは目的に応じて違ってくるが、児童が楽しく分かりやすく学び合いながら、学びの質を高め、よりよい学び方を身に付けていってくれることをねらいとしている。

イ期待される効果

<児童にとっての効果>

- ・自分の学習課題を持ち、よりよく学習しようとする意欲や自主性が増す。
- ・自分の考え方、疑問、アイデアがより生かされる。
- ・児童が自分の学習のペース、学習スタイルをつかみ、学習の仕方や学び方を身に付けることができる。
- ・児童と教師のかかわる機会が増え、教師と児童の信頼関係が深まる。

<教師にとっての効果>

- ・児童の理解の程度、知識・技能の定着の程度、学習スピードの違いなどの個人差に応じた指導ができる。
- ・学習課題や学習方法など目的に応じた学習形態をとることができる。
- ・児童一人一人の様子がよく分かり、児童理解が深まる。
- ・教師がお互いに教材研究し、協同したり補い合ったりすることで、教師の資質向上につながる。

ウ基本的な指導形態

◇TT指導

・分担TT

T1が主に一斉指導、T2が個別指導やグループ指導をする。

・協同TT

T1とT2が同じような役割をしたり、T1とT2が役割を交代したりしながら、協同して授業を進める。

◇少人数指導

学級を等質に分割して指導する。

◇習熟度別指導

理解、習熟の程度、学習方法などの違いに応じて、分割して指導する。学級や学年を、2つまたは3つのコースに分割する。

2つに分割するとき… 補充的コース、発展的コース

3つに分割するとき… 補充的コース、標準的コース、発展的コース

学級や学年によって独自のネーミングをしている。例えば、低学年では、パンダコース・きりんコース・チーターコース、4年生では、じゅっくりコース、ちゃくちゃくコース・ぐんぐんコースなどである。

【補充的コース】

既習事項の習得が十分にできていなかったり、理解に時間がかかったりする場合が多い。個別に十分にかかわり、具体物や具体的な操作を取り入れながら理解の程度に応じた指導をし、基礎・基本の定着を図る。

【標準的コース】

理解力のある児童と理解にやや時間がかかる児童が混在している。個

に応じて指導をし、基礎・基本の定着を図りながら、場合によっては補充的な指導や発展的な指導を行う。

【発展的コース】

既習事項の定着がある程度できており、理解の速い児童が多い。新しい学習では、考え方、説明する力などの育成を図りながら発展的な指導を行う。

エ指導形態を決める観点

◇TT指導

分担TT

- ・単元の導入時などで、共通理解の指導が必要な場合
- ・理解や習熟度などの個人差があまり見られない場合
- ・一斉指導と個別指導やグループ指導を同時に進める場合
- ・まとめの段階で、全員で学習する場合

協同TT

- ・2人の教師と一緒に授業を進める場合
- ・児童の興味・関心によって課題を選択させる場合

◇少人数指導

- ・個人差のある児童をあえて混在させて、少人数で授業を進める場合
- ・少人数で基礎・基本の定着を図る場合
- ・操作活動が多い場合

◇習熟度別指導

- ・理解や習熟度などの個人差が見られ、その程度に応じて学習を進める場合
- ・学習方法別に課題解決を進める場合
- ・習熟度別に基礎・基本の定着を図る場合
- ・習熟度別に補充的指導、発展的指導をする場合

オ指導計画の工夫

- ◇新しい単元に入る前に、その単元にかかわる事前テストを実施し、基礎・基本の実態把握を図るとともに、定着できていない事項について事前指導している。
- ◇学級や学年担当の複数の教師で教材研究し、単元の目標を明確にし、基礎・基本の明確化を図っている。
- ◇1単位時間ごとの指導計画を立て、学習内容や方法、児童の実態などを考慮し、それぞれの指導形態を決定する。例えば、単元の最初から最後まで習熟度別指導で進める場合もあるし、最初はTT指導から入り、途中から少人数指導や習熟度別指導を行っていくなど指導計画に弾力性を持たせている。
- ◇単元末にテストを実施し、達成度の低い場合は時間を設けて補充的指導を行っている。

カ指導上の留意点

- ◇習熟度別指導のコースを決定する際、オリエンテーションを行い、児童がコース別の目標やねらいを把握し、今後の学習の見通しを持つるようにしている。
- ◇単元前の事前テストなどにより児童が自分の力を判断し、教師と相談した後コースを自己選択している。児童が自分で判断できないときは、教師がコースを決定することもある。
- ◇単元の途中であっても、児童の希望があればコース変更を可能としている。

教材の開発

教材や教具の開発の時間がなかなか取れないのが悩みであるが、個に応じた指導を進めていくためには、補充的な教材や発展的な教材の積極的な開発が必要である。教材を次のように捉え、教材の開発に努めている。

ア基礎・基本の確実な定着を図るため
イ学んだ内容を生かす・深める・広げるため

ウ学ぶ楽しさを味わい、算数の能力を高めるため

評価

ア各学年、小單元ごとに観点別の評価規準を作成している。A規準、B規準の両方を作成し、指導に生かせるようにしている。

イ座席表を利用した評価カードや学習記録表などを作成し、教師が毎時間の児童の取組を評価し、記録している。それをもとに、単元末や学期末に同学年の担当者と十分な情報交換を行っている。

ウ児童が自己成長感を実感できるように毎時間の終末に自己評価し、学んだことやできるようになったことなどの観点をもとに学習の成果を振り返らせている。

平成
15
年度

テーマ

確かな学力を培う豊かな学びの創造
算数科を中心とした学びのシステムづくり

研究の見通し

学校教育目標や研究主題そして児童の実態などから、今年度の研究で3つの「めざす子ども像」を設定した。1つめは、自分の考えがしっかりと伝えられる子、2つめは、他の人たちといっしょに助け合って伸びていこうとする子、そして、3つめは、自分から意欲的に学習しようとする子である。

そんな子供たちをめざすためには、一つの教科、授業の工夫だけではなく、話し合える、分かり合える学習集団作りが基盤となる。助け合いの心や自己主張と受容、やろうという気力は、安定した集団の中でしか実現しえないと考えるからである。その上で、授業を取り巻く環境づくりをめざして「指導体制の工夫改善」と中心となる教科・算数科の「指導法の充実」を2つの柱として研究を推進していくこととした。

「指導体制の工夫改善」の方法としては、特に算数科においての習熟度別指導、少人数指導、TT指導を取り入れた学習形態の工夫。そして、指導者の得意分野を生かす教科担任制の導入、さらに、学級担任だけではなく全校で補充学習にあたるような指導体制の確立、地域の方の力を学習に導入しようとするスクールサポーターの活用などを考えた。

一方、「指導法の充実」の方法としては、めざす子ども像の一つである「自分の考えを表現できる子」をめざして、算数科の中で筋道立てて話す力を育成するための取り組みをすること。そして、算数的活動を効果的に取り入れることにより体験的な学習指導の確立をすることや個に応じた指導のための評価の工夫、学習形態の工夫に伴う発展的、補充的学習の教材開発などを考えた。

これらの実践を重ねていくことにより、子供たちにいろんな体験ができる学びや関連づけた学びといった豊かな学びを保障することができ、その結果として確かな学力が付き、私たちがめざす子ども像に近づけることができるであろうと考えた。

研究の内容・方法

学習形態の工夫

個に応じた指導のための指導方法・指導体制の工夫改善として、研究の中心教科である算数科の学習において、一斉指導、TTや少人数、習熟度別指導を学習課題や学習内容、学習方法そして児童の実態に応じて、最も有効と考える形態を組み合わせ指導にあたっている。

1、2年では、各学年2学級の算数の時間をずらして、常に担任ともう一人の教員とのTT指導、または学級を習熟の差に応じて2つのコースに分ける習熟度別学習を行ってきた。3～6年生は、学年の算数の時間帯を同じにして1時間ごと交代でそれぞれの学級の指導にあたるTT指導や、学年を3つのコースに分けた習熟度別学習を行っている。学習の進め方については、週に一度、単元の計画や教材分析、教材作り、授業後の反省などについて担当者で話し合う時間を確保してきた。

また、少人数やコースに分かれた習熟度別学習を進めるために、特別教室の環境を整え、算数の学習教室としても利用できるよう工夫した。さらに、3つある図書室の一つを「一人調べ学習室」にし、算数、国語、社会、理科のコーナーには、学習に必要な本を配置して、いつでも児童が自由に活用できるようにしている。

補充学習・発展学習への取り組み

現学年での毎日の授業における理解や技能の遅れ、授業時間内に消化し切れなかった学習等については、放課後や休み時間を使って各学級担任が個別に指導することとなる。しかし、それ以前の学年でつまずきがあり、それが現在の理解や技能習得の妨げとなっていることがある。そのような場合に、学級担任一人が毎日の授業を進めながら以前のつまずきを補っていくという事はたいへん困難なことである。

そこで、教職員みんなが協力し合っって子供たちの指導にあたれないものかと考え、全校体制による補充学習システムを考えた。つまずきといってもいろんな要因が考えられるが、まずは四則演算からできるようにしていこうと特設の時間を設定した。さらに、つまずきの克服だけではなく、習熟のできている子供たちにもより高い習熟をめざして発展的な学習に取り組ませる時間とした。

1、2年生 水曜5校時 月2回 3～6年生 金曜6校時 月3回

学年を補充と発展コースに分け、各学年3名の指導者で担当する。

個人カルテに記述されている評価の視点にあわせて、補充プリント（No1～189）、発展プリント（1～No101）を作成した。

補充コースは、個別に指導しながらプリントを進め、発展コースは、自分で答え合わせをしながらプリント学習を進めていくような方法を探った。

評価の工夫

児童個々の実態をよりよく把握し、次の指導につなげていける方法はないかと考えた。評価を1時間内にとらわれずに行っていけるように、4つの場面に分けて考えることとした。

・授業前の評価

新しい単元に入る前には、事前テストを行い児童の実態把握に努めた。そして、その結果を、習熟度別指導を取り入れる際のコース選択の参考資料とすることとした。また、TT指導や一斉指導の際には、個別指導に重点をおかなくてはならない児童の把握ができ、既習事項の理解度や習熟度を確かめることができた。

・授業中での評価

授業では、やはり全員の理解や習得をめざしている。したがって、その場で指導することが最も大切なことである。一人一人が正しく理解し課題に取り組むことができているか机間指導をしながら評価し、正しいときには丸つけをしたり賞賛の言葉がけをしたりする。間違いがあったり、つまずきがあったりする場合には簡潔なヒントを与え個人指導をして正しく導くというように、評価と指導の一体化を図っていく。また、児童については、学習内容や自分の変容を確かなものにさせていくために、ふりかえりカード（自己評価カード）にその時間でわかったことやできるようになったこと、思ったことなどを書かせるようにしている。

・授業後の評価

授業中に児童の発表、操作の様子、ノート、練習問題などについてチェックし、座席表や記録表などに記入しておく。その表をもとに、児童のつまずきやよいところを明らかにし、教師の指導を自己評価したり同学年の担当者との情報交換をしたりしている。

・単元ごとの評価

市販テスト及び自作テストに加えて授業後の評価を考え合わせ単元ごとの評価を行っている。そして、児童各個に個人カルテを作成している。

個人カルテ

- ・個々をしっかりと評価して個に応じた指導に生かすため
- ・担当間の児童理解のため
- ・保護者への説明責任にも対応できるように

昨年度作成した評価規準をより具体的に児童の実態が把握しやすい評価の視点を決めた。

発展的学習の教材開発

「個に応じた指導を充実させる」という観点から、補充的な学習の機会を設けると同様に、基礎・基本を身につけた児童に対して、発展的な学習の機会を設けることが求められている。

本校では、習熟度別学習における発展的コースを指導するときに、他のコースの指導内容も考え合わせ、児童に桁数を増やした課題を与えたり、解決した問題をお互いに説明できるようにさせたりと教材の開発に努めている。

6学年では、「立体」の学習において、教科書に取り上げられている立方体の展開図に削除された内容である円柱や三角柱の展開図を加え、児童

の興味関心に基づいた課題選択学習を行った。
 また、児童のつまずきに対応するために補充学習体制を整えたことは前述のとおりだが、それは、つまずいている児童や学習に遅れがちな児童だけを対象としたものではなく、基礎・基本を身につけている児童に対しても、各学年で選び出した発展プリントを準備し、学習の機会を設けた。

筋道立てて話す力

算数科において、自分の考えをわかりやすく順を追って話す、伝えるという力は、どのようにすればついていくかについて考え、次のような取り組みをした。

・「説明の手順」の作成

文章題を解きその方法を説明するときに、説明の手順を書いたものがあれば、説明がしやすいのではないかと考え各教室に「説明の手順」を掲示した。児童の発達段階を考え低・中・高学年用を作成した。

・「話すこと・聞くこと」年間指導計画の作成

より確かな表現力をつけていくためには国語科においてどの単元でどのような力をつけていくか、そして、日常生活でどんな場を設定していくかを明らかにして指導していく必要がある。
 そこで、年度始めに1年間を見越して年間指導計画を作成し指導にあたることにした。

平成
16
年度

テーマ

確かな学力を培う豊かな学びの創造
 算数科を中心とした学びのシステムづくり

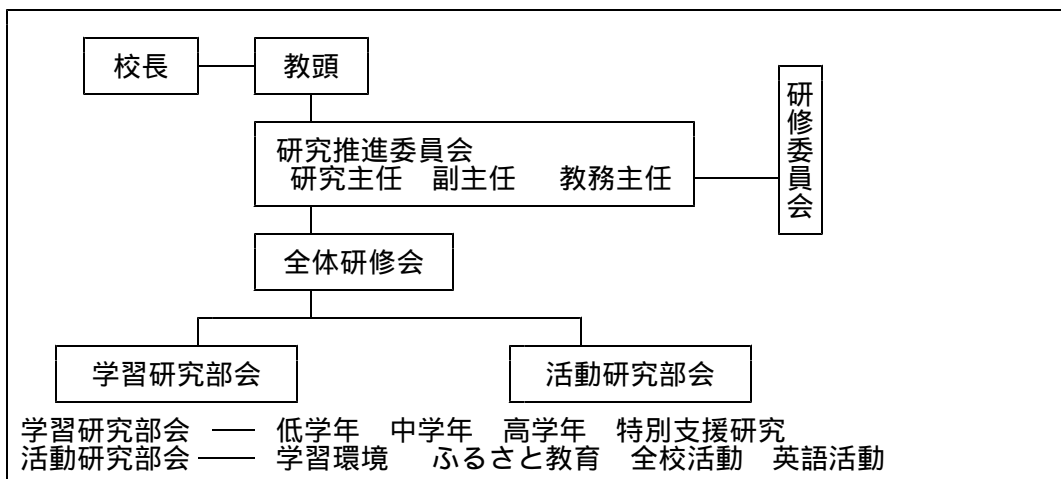
研究の見通し

教科の基礎・基本の定着を図ることに主眼を置き、算数を中心に、表現できる子、共に高め合う子、主体的に学習する子の育成を目指す。その実現に向けて、聞く授業から自分から進んで働きかける授業づくり、考えたり発見したりすることの喜びを味わう授業づくりに努める。また、TT指導、少人数指導、習熟度別指導など個に応じた指導を行い、基礎・基本の確実な定着に努める。

研究の内容・方法

習熟を図る場、追究する場、練り上げ鍛えていく場など学習過程に応じた適切な指導計画を作成する。一斉指導、少人数指導、習熟度別指導など個に応じた指導や教科担任制を積極的に進め、「話す、聞く」を共通のキーワードとして自分の考えを表現できる子の育成に努める。基礎・基本の確実な定着を図るとともに、補充的・開発的な教材づくりを進める。評価の工夫・改善に努める。3年間の成果と課題をまとめ、公開する。

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

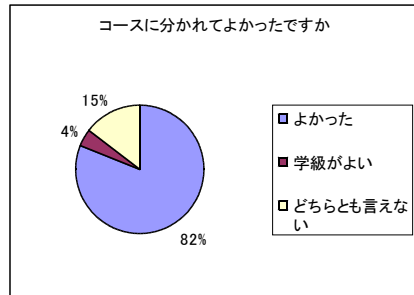
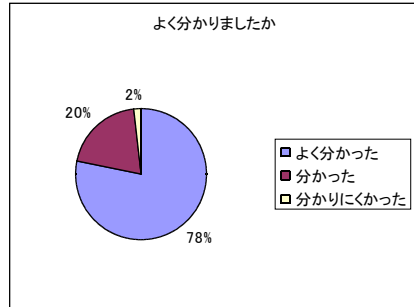
算数についてのアンケートから
今年度習熟度別学習を行った後、第5学年を対象にアンケート調査を行った。「よく分かった」「分かったという児童が98%を占め、ほとんどの児童にとって、習熟度別学習は、学習内容がよく理解できる学習形態であることが分かる。また、「コースに分かれてよかった」とする児童が82%であり、児童にとって満足の得られる学習形態であったことが伺える。児童一人一人のつまずきの程度や学習進捗の速さに応じた指導が可能となったことや自分の考えを発表しやすくなったことなどがその理由として考えられる。

しかし、一斉指導による学習の方がよいとする児童も少数ではあるがいる。その理由は友達関係によるものである。すべての児童が安心して学習できる学習集団づくりをさらに進めていくことが、学習効果の向上につながると考えられる

学力調査結果から

2002年度学力調査結果(第6学年算数科)と同一問題を用いて2003年度の第6学年に対して行った調査結果を比較検討してみた。平均点は、2002年度は83.4ポイント、2003年度は83.6ポイントと若干であるが高くなっている。<表1>は、両年とも問題別の達成率を示すとともに達成率が向上した順に並び替えてある。達成率差をみると、向上した設問には、習熟度別指導、体験的な学習、その後の繰り返し指導等の手だてをとったものが多いことが読みとれる。特に、「円の面積(大問7)」「三角形の内角(大問4)」など図形領域は、20~30%も達成率が伸びている。また、「割合(大問15)」についても習熟度別学習の効果が明らかである。

一方、今回の結果からは習熟度別学習の効果が明確でなかった設問には、「計算(大問1)」「偶数選択(大問3)」がある。習熟度別学習の欠点の一つとして「家庭学習課題の出しにくさ」がある。今回の達成率の低さは、家庭学習や放課後の補充指導の緻密さが不足したのではないかと考えられる。また、両年度を通じて習熟度別学習の形態をとったものの中に、達成率の低いものもある。その内容は、「平均値の利用」「線分図の利用」「変わり方を調べる」である。それらは、「具体的な場面を想起する力」「説明する力」をつけていなくては向上しないと考える。どのような指導過程の中で身に付くのかを今後検討していかなくてはならない。



問題番号	2002達成率	2003達成率	達成率差	学習形態等
大問7 式	64.0	93.6	29.6	習熟度別 体験的 くりかえし 5年
大問7 答え	62.0	91.5	29.5	習熟度別 体験的 くりかえし 5年
大問4	72.0	93.6	21.6	習熟度別
大問15	56.0	74.5	18.5	習熟度別 くりかえし 5年
大問5	80.0	97.9	17.9	一斉指導 体験的 5年
大問6	92.0	100.0	8.0	一斉指導 体験的 5年
大問17 (2)	94.0	100.0	6.0	習熟度別 5年
大問1 (5)	96.0	100.0	4.0	習熟度別
大問9	92.0	95.7	3.7	習熟度別 6年
大問14	46.0	48.9	2.9	習熟度別 5年
大問1 (2)	88.0	89.4	1.4	習熟度別
大問10	70.0	70.2	0.2	習熟度別 5年
大問2	100.0	100.0	0.0	習熟度別
大問17 (1)	96.0	95.7	-0.3	習熟度別 5年
大問1 (4)	76.0	74.5	-1.5	習熟度別
大問12	98.0	95.7	-2.3	一斉指導 6年
大問1 (3)	92.0	87.2	-4.8	習熟度別
大問3	92.0	87.2	-4.8	習熟度別
大問13 答え	88.0	83.0	-5.0	一斉指導 6年
大問8	80.0	74.5	-5.5	習熟度別 5年
大問1 (1)	98.0	89.4	-8.6	習熟度別
大問11 (1)	96.0	87.2	-8.8	一斉指導 6年
大問17 (3)	66.0	53.2	-12.8	習熟度別 5年
大問16	92.0	78.7	-13.3	一斉指導 5年
大問1 (6)	86.0	72.3	-13.7	習熟度別
大問11 (2)	74.0	57.4	-16.6	一斉指導 6年
大問13 理由	86.0	68.1	-17.9	一斉指導 5年

2. 今後の課題

(1) より個に応じた指導を実現させていくために、個人のみならずよく見極め指導にあたるのが大切である。そのために、個人カルテの見直しと活用の工夫をしていく必要がある。算数的活動を有効に取り入れ、発展的、補充的学習の教材開発を進めていく。
一斉指導、TT指導、少人数指導、習熟度別指導など、それぞれの形態の効果をさらに追求し、どの単元で、指導計画のどの時間に、どのような形で指導していくかを実践の中で明らかにしていく。
「筋道立てて話す力」を育成していくために、教材の工夫や指導方法の改善をしていく。

学力等把握のための学校としての取り組み

- 1 単元の始めや中間、終了時に定着度をみるテストを実施し、定着できていない児童に指導をして定着を図っている。
- 2 年度末に教研式CRTテストを実施し、児童の1年間の学習状況を把握するように努めている。
- 3 県学力調査により、定着度をみたり誤答分析をしたりすることで今後の指導に生かしている。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- 1 本校のホームページにおいて取り組みを紹介している。
<http://edu.city.obama.fukui.jp/obama/index.htm>
- 2 研究発表会（平成15年10月31日）で授業公開し、成果を報告している。
- 3 今年度の研究集録（のちせの教育）を研究発表会において発刊した。
- 4 嶺南地区教育充実研修会（平成15年11月27日）において実践発表をした。
- 5 福井県学力向上推進協議会（平成15年12月24日）において実践発表（紙上）をした。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 6学級以下 7～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 一部教科担任制 その他
- 【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無